

# 系鹿子

5月号

鈴鹿呂仁  
拾掬集 その五十六

早春の鬣風に馴染み待す

早春の街は疼きの色を見せ

片恋の小さな日記さくら貝

打ち寄せる波の眩きさくら貝

採決は卵が先に蝌蚪の紐

呉と越のマイク合戦花の駅

言ひ訳の二転三転猫の恋

引き算を子には教へず親すずめ

臥す目には坪庭に足る蜺花

御所吟行五句

忍び音の浅沓ふたつ花の陰

九門閉づ朝敵のごと霾の空

春北風の行き場失ふ猿ヶ辻

遠州の洲浜に寄せる春の雲

囀りの空はいちまい建礼門



近詠

鈴鹿 仁



雀の子

囀や四角四面の五線塀  
梅咲いて音符をあげる御所鴉  
芽吹く日の背すぢ辺りの重さかな  
古草や明日香は謎の史をもちて  
雀の子どう転んでも唄となり

近詠

和田 照海



鹿尾菜刈る

漁の一舟ひろげゆく春暁  
はんなりと口無瀬戸の涅槃閣  
啓蟄や穴ひとつづつ植木鉢  
青鰻や某日として恙なし  
引潮の能島が渦の鹿尾菜刈る

松本 鷹根



塩貝 朱千

和気陽気

木蓮の花芽犇く友好碑

栖む気配なき如月の池覗く

紅足の鳩の寄り来て水温む

犬ふぐり踏み郷愁の畦辿る

豌豆の花咲き狭庭和気陽気

## 近 詠

酒天童子

ワインレッドも滅びゆく彩寒鼻

酒呑童子てふ真つ赤な椿鳥を呼ぶ

やんはりと樹林太らす春の雪

一戸への径を探して初うぐひす

露のたう二つに大き案内囃

## 英華採集

裾あげの赤い待針雪をんな

千葉 高野 春子

以前、裾あげと言えば妻が市販のテープを使いアイロンで張り付けていたような記憶があるが、今では買ったお店で裾あげをして貰っているのが多いと思う。その時、店員の人が待針一本で長さを調節している。日常的な動作で余り気にも留めなかったが、作者はそこに着眼をした。赤い待針から赤いマニキュア、赤いルーージュへとイメージを膨らませていくと「雪をんな」に辿り着く。裾あげのズボンの色は鮮やかな真つ白に違いない。

割り算の余りは知らず桃の花

寝屋川 寺元 流泉

小学校の算数は、九九の掛け算の後に割り算を習うのだろうか？一つの呪文のように覚えた掛け算と違い、割り算を覚えるのは殆どの子供達が挺子摺るのではないだろうか。割り切れない問題では特に「余りがいくつ」という答えに辿り着くには時間が掛かるのかも知れない。掲句は、孫の女の子に教えている母親の困った顔が目に見えぬ。季語の「桃の花」に女三代の微笑ましい構図が見えてくる。

生涯に切字はいくつ年歩む

青梅 金子 野生

切れ字と言え、芭蕉に「切れ字に用ふるときは、いろは四十八字皆切れ字なり」という名言がある。作者は、今までの来し方に切れ字はいくつあったのだろうか？と振り返っているが、この切れ字は人生の節目を比喩として使っているのである。様々な出来事が脳裏に浮かんだに違いない。嬉しい事は兎も角、悲しい事に思いを馳せながらこれからの余生にその「切れ字」が無い様に生きていきたいと願う作者の思いが「年歩む」に凝縮されている。

水温む 藤岡紫水

白梅にただよふごとき蛾眉の月  
塔の反り締める陽光春寒し  
京菓子に絹の手ざはり春立つ日  
春の灯をゆたかに洩らす花頭窓  
からみ合ふ静かな魚紋水温む

夏落葉 沼田巴字

牡丹の胎を思はず花芽なる  
空に展げし嬰の拳や柿若葉  
新緑へ飛び込むころ身も軽く  
若楓若死にをせし父のこと  
闘つて生きる術策夏落葉

春雷 丸井巴水

寒明けや吉田の神を神棚へ  
結び目を背中へ廻し冬牡丹  
隠れ住む山村三家雪重り  
腹の虫押さへ込みたる春の雷  
小雪舞ふ山湯帰りの丸太橋

節は春 植村蘇星

九合目挑む眼差し青き踏む  
句は心生かされ生きて梅七分  
猫やなぎ瀬音かるやか詩ごころ  
春耕や一日一善陽は西に  
生かされて心のゆとり節は春

毛糸玉 北川孝子

昭和てふ時代名残りの毛糸玉  
深深と夜の更けゆく夜のみかん  
摺り粉木にまだ木の匂ひ二月過ぐ  
やはらかに昆布煮上る春休暇  
今日も亦かくてありけり夜のみかん

立春 高木晶子

注連縄を外し初老の友来たる  
もう誰も育てて呉れぬ露の藁  
節分の鬼より激し人の息  
立春のバスの傾く八坂前  
立春の香水として堰き止めず

淑気 直江裕子

梅咲いてまだ年寄りをやってゐる  
蓋とれば誰のものでもない淑気  
人日や数字で呼ばれることに慣れ  
何かもの言ひたげなままの手袋  
春隣ラップの端が見つからぬ

恋猫 伊藤希眸

立春の明るさ生垣の崩るまま  
すれ違ふ恋猫人を揮らず  
富士の嶺を遠く春田の打たれをり  
逆光のさざめき鴨の群帰る  
春の雷地を裂く音も落しけり

白木蓮 奥田筆子

噛み癖のあるコートや捨てちまおうか  
ころろてふ大きな器白木蓮  
北欧の羽毛三月空を見ている  
おしやべりのま裸となり春炬燵  
理系女の友風除けとして雪をんな

冬蝶 村田あを衣

風に夢託し葉裏の冬の蝶  
夢あらば翔てよ冬蝶日溜りへ  
冬蝶の翳をたしかむ身のあり処  
離愁かな視野よりこぼる冬の蝶  
冬蝶の渡る思案の夢の橋

麦秋 井上菜摘子

初夏のおひとりさまは軽く浮遊  
音合せの途中をひらく白牡丹  
麦秋を走る走る恩返さねば  
まだ誰もはいらぬお墓白藤垂る  
もらひ泣きしてをり苺つぶしをり





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

大屋根の分厚き雪解永平寺

京田辺 山中志津子

寒夕焼鉄塔誰の墓標なる

星くずを掬へばこぼる雪解風  
春暁のどろどろとつて置きゆめ

城陽 鷺山 珀眉

水仙の香る電話の向かうかな

日永かな大路小路を上る入る

冬桜仮の世に生き手記綴る

自画像の遠景どこもおぼろなる

綿虫の高さで失踪思ひもし

余寒なほ急須の蓋の穴ひとつ

着ぶくれてこだはり一つづつ捨てる

京都 井尻 妙子

万両や無効となりしパスポート  
口止めをされし言の葉寒昂

福山 亀井 福恵

赤い橋渡れば母郷雪解風

雪解しづく追憶にまた涙して

イヤリング外す余寒の風の中

料峭や歩いて行ける友を訪ふ

横顔に初髪といふ角度あり  
峡抜ける風を逃さず懸大根

音立てて堰越ゆしぶき雪解川

福知山 西村 白杼

亀鳴いて明日香美人に疎まるる

蒲公英や飾らぬ色は母の色

のたりのたり象の影ゆく春の風

百千鳥大枝はねる神の杜

ふきのたう目と目で足りるテレバシー

京都 菊池 和子

はだれ陽のまだら遊びや梅ふぶむ

梅見月寄り添うてくるピタゴラス

芽柳吹く岸に寄せくる水心

余寒なほ陶狸徳利いつも空

如月の光のシャワーみどり児立つ

高槻 安田 優歌

「てにをは」に躓く夜の朧かな

地球儀と語る少年東風の窓へ

如月の光の束を病窓へ

残齡へささやきかける寒北斗

寒林の行き交ふ木霊翳ひとつ

乗り合はず兎の耳の冬帽子

華頂山寒の極みの男坂

落合ひの水音解けねこやなぎ

薄墨の空へはにかむ姫椿



裾あげの赤い待針雪をんな

千葉 高野 春子

冬虹へ傾きながら一両車

鳩サブレはんぶんこするちゃんちゃんこ  
ぬひぐるみに貫つてしまふ春の風邪

割り算の余りは知らず桃の花

寝屋川 寺元 流泉

冬銀河静かに胸に燃ゆるもの

ひとりゐてひとりにあらず冬の海

冬ざれや故郷に帰るところなし

生涯に切字はいくつ年歩む

青梅 金子 野生

クリスマススルー夕餉に青魚

数へ日ぞブルーシートのままの屋根

紙を漉く波と遊ぶと笑む匠

舞初白粉匂ふ舞台裏

アリソナ 伊吹 之博

去年今年吸呑みを待つ父の唇

冬ぬくし老舗の主人祖父を知る

凍て寺に仁王立ちなる警備員